

427 生体部分肝移植ドナー手術22例の経験

東北大学第二外科

川岸直樹、大河内信宏、桜田正寿、織井 崇、菊地広行、中鉢誠司、小山田尚、浅倉 毅、及川公正、高山 純、里見 進

〔目的〕生体部分肝移植におけるドナー手術では、ドナーの安全性が最優先されるが、移植肝のviabilityを良好に保つことも重要である。今回、当科でのドナー手術について、出血量、手術時間、および術後経過等を術式別に検討した。〔方法〕1991年7月から、1997年7月までに当科で経験した生体部分肝移植ドナー手術22例を対象とし、出血量、手術時間、術後肝機能、合併症等について、外側区域切除5例(LS群)、左葉切除14例(LL群)、中肝静脈を含む左葉切除3例(LLM群)の3群に分けて検討した。〔結果〕出血量、手術時間、術後肝機能は、3群間で有意差なし。LS群のうち2例は無輸血手術であった。腹腔内膿瘍からDICに陥った1例を除き、重篤な術後合併症は見られなかった。〔結語〕生体部分肝移植ドナーにおける肝外側区域切除術、肝左葉切除術は安全な術式ではあるが、重篤な合併症も考慮し、慎重な周術期管理が必要である。

428 クロウン病合併痔瘻にたいするクシャラ・ストラによる治療成績

富山医科薬科大学第2外科¹⁾ 不二越病院²⁾
山本克弥^{1,2)}、田澤賢次¹⁾、大西康晴¹⁾、斉藤智裕¹⁾、増子 洋¹⁾、竹森 繁¹⁾、新井英樹¹⁾、佐伯俊雄²⁾

〔はじめに〕クロウン病に合併する痔瘻は複雑で治療に抵抗を示し患者のquality of lifeを低下させる重要な要因となっている。今回クシャラ・ストラによるクロウン病合併痔瘻16例を経験したのでその治療成績を報告する。〔対象〕85年7月から97年7月までにクシャラ・ストラで581例、638瘻孔の治療を行い、そのうちクロウン病合併痔瘻16例26瘻孔を対象とした。〔結果〕対象症例は男11名女5名、平均年齢27.3才であった。クロウン病合併26瘻孔の糸交換平均回数は2.0回、解放創までの平均日数17.0日、入院平均日数48.7日、治療期間平均は15.4週であった。非合併例はそれぞれ1.5回、13.6日、20.6日、6.3週と合併痔瘻の方が長期間を要した。合併症は16症例19回中11回57.9%と高頻度であったが、肛門閉鎖不全、肛門狭窄など高度のものはなく、肛門痛、不良肉芽形成などであった。19回の治療のうち5回(26.3%)に再発を認めた。1例は5年間で3回本法を施行したが一時期治療するが腸管病変の増悪とともに再発をきたし現在治療に難渋している症例、1例は再発後ドレナージ手術を施行したが症状の軽快が認められず、社会的適応、本人の希望でdiverting stomaの造設後治療した。〔まとめ〕本法は治療期間は長いが高度の合併症を来さず有効な方法である。また、再発症例を検討すると、患者のquality of lifeを向上させる適切な治療法の選択が重要であることを再認識した。

429 Crohn病に合併した直腸膿瘍(RVF)の外科治療に関する問題点

東北大学第一外科

上野達也、佐々木巖、内藤広郎、舟山裕士
福島浩平、柴田近、増子毅、高橋賢一
小川仁、佐藤俊、橋本明彦、松野正紀

Crohn病(CD)に合併する直腸膿瘍(RVF)は難治で、外科的治療上大きな問題を有する。今回教室で経験したCDのうちRVF症例につき検討した。RVF合併CD患者は8例であり、女性CD患者の22%であった。CDの診断時年齢は平均21.4歳、CDの診断からRVFの発症までは平均4.8年であった。8例中6例は直腸病変を有し、腸管病変の増悪と同時期にRVFが発症した。RVFの位置では、8例中5例が肛門拳筋に近い低位型で、3例は肉眼的に同定できなかった。CDの病型は全例小腸大腸型であった。治療としては、腸管病変を合併した6例には回腸瘻造設術を行い、残る2例はドレナージ手術を施行したが改善せず、最終的に回腸瘻を造設した。現在まで8例全例に回腸瘻によるfecal diversionを行ったが、自然閉鎖した例はみられていない。その後2例に対して経陰的修復術を施行したがいずれもRVFが再発した。しかし回腸瘻造設により局所の炎症の改善にもとづく経口摂取の増加により栄養状態、QOLの向上が得られた。

430 救命および症状緩和を目的としたクロウン病に対するストーマ造設の意義

札幌厚生病院外科

益子博幸、近藤征文、中村隆志、岡田邦明、大沢昌平、石津寛之、西田靖仙、星 智和、秦 庸壮、白川春美、白山真司、正村裕紀

【対象】最近12年間に当科で手術を施行したクロウン病症例は50例で、のべ71回の手術を行った。このうちストーマを造設した8例を対象とした。

【結果】性別は男性7例、女性1例で、手術時の平均年齢は27.3歳(20-38歳)である。穿孔3例、瘻孔形成1例の緊急手術例は全身状態不良のため救命処置としてストーマを造設した。難治性肛門病変のためにストーマを造設した症例は4例で、このうち2例は社会復帰のため自ら希望、他の2例は激しい会陰痛のために日常生活も妨げられストーマを造設した。いずれの症例もQOLの改善をみた。

【まとめ】クロウン病におけるストーマ造設は①救命処置、②社会生活が継続困難な場合には有効な治療である。また副次的にストーマ粘膜の変化からクロウン病の増悪の指標にもなった。